

小澤征爾

小澤氏との思い出を回顧——日本とスイスの架け橋



1935年9月1日 - 2024年2月6日 享年88歳

中 東 生

2月6日長い闘病生活の末、「世界のOZAWA」が心不全で旅立った。癌と戦いながら88歳まで頑張れたのは、音楽への情熱が尽きなかったからかもしれない。15年前、スイスのロールでインタビューした時の姿を思い浮かべた...

2009年6月25日スイス国際アカデミー (IMA。現在は小澤の名を冠している)に小澤氏を訪ねた。彼は6月13日にパリでヘルニアの緊急手術を受けた直後だったが、一週間の療養後、「指揮は1時間」という制限付きでロールにやって来たのだ。それなのに、ふわっと、あまりにも自然な「世界のマエストロ」は人との間に隔たりを作らない。そして独特の小澤節で質問に、真剣に答えてくれたあの濃い1時間半が忘れられない。

「弦楽四重奏がクラシック音楽アンサンブルの基本、というのが斎藤秀雄先生の信念で～(中略)～奥志雅で始めたの。～(中略)～僕がウィーン

国立歌劇場と契約した時に『ヨーロッパでもやらないか』って言われたの。でも、なんとなくどこで始めていかに解らなくてね。そこに、ブランシェとオリヴィエ(現IMAプレジデント兼アーティストック・ディレクター)が『スイスでやらないか』って僕のところに来たの。『ああ、スイスっていいのは中立でいいなあ』と思って。ウィーンとかベルリンとか、大きな街でやると、その音楽学校なんかと密接になっちゃうでしょ」

そんな経緯で2005年にスイスで生まれたIMAは小澤国際室内楽アカデミー奥志賀や小澤征爾音楽塾、セイジ・オザワ松本フェスティバル等と繋がり、世界からスイスへ、そして日本への架け橋となったのだった。

小澤征爾という名が音楽界に興味のない人々にも周知されたのは、1962年12月にNHK交響楽団が小澤征爾の指揮するはずだった定期演奏会をボイコットした事件だろう。その「禁忌」とも思われていたテーマにもインタビュー時に自然に触れられたのは奇跡だった。

「(前略)東京新聞の学芸部に横溝正史の息子がいて、成城学園の先輩なんだけどね、『N響の黒い霧』というロマンチックな名前で、3面の最初にパーって真っ先書いてくれて、それで僕、有名になったんだよ。～(中略)～当時は本当に大変だったけれど、やっぱりね、相当生意気だったと思うんですよ。『この馬鹿野郎！もう日本なんか絶対帰らない。もう日本では仕事しない』なんてニューヨークのマネージャーに言ったの。それなのに翌年帰って来たんだけどさ(笑)。偉そうなこと言っていたけれど、心のどこかでは『しまった、生意気だった...』

と思ってたんだね。『アメリカナイズ』という言葉は当時、特に芸術の世界ではネガティブな意味合いで使われていたんだけど、よく言われていたから、『なるほど、そうなのかな』って少しは解って、『N響事件』がかえって大チャンスになったね。」

「赤裸々」という言い回しを体現したような正直な感情描写がポンポン出て来るのに、そこにジメツとしたマイナス感覚はない。少年のような自然な、それでいて熱い小澤氏は、インタビュー後レッスンになると目を輝かせて、音楽へ没頭していく。そのエネルギーは何時間も枯れることがなかった。

このインタビューの1年後、食道がんで活動を休止したが、その後も復帰して指揮や後進の指導を続け、2022年長野県の「ONE EARTH MISSION Unite wiith Music 小澤征爾 / SKO & JAXA 共同企画」が最後の指揮となった。2023年セイジ・オザワ松本フェスティバル9月2日の公演でアンコール中に舞台上に呼び込まれたのが、公の場に姿を見せた最後だったという。車椅子姿の小澤氏は頭に差したサングラスやブランケット等を赤で統一してお茶目な格好だが、首に巻かれた赤い布は氣道に穴を開けられた部分を隠しているように見える痛々しい姿で、それでも生きてくれる姿が見られただけで皆をカブけただろう。

小澤征爾は音楽家としてだけでなく、日本人にとって、そして人間にとって学ぶところが沢山ある魅力的な人であった。彼亡き今、日本は、そして外国で頑張る私達は特に、彼の生き様・功績を辿ってみることが重要だと思われる。どこか1つでも、彼から学べる事が見つかるだろう。

